転生対魔忍は雪女

幽姫兎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

元男子高校生の転生者が『対魔忍ＲＰＧＸ』の世界に女の子として転生して、校長を筆頭とした頭対魔忍な周囲の人間に振り回されながらも己の尊厳だけは守り通したいお話（守り通せるとは言ってない）

作者は既プレイ作品が決戦アリーナとＲＰＧぐらいなので設定とかに間違いがある場合があります。

なるべく間違いのないようにしますが誤字含めて何かありましたら感想までお寄せ

ください。

目次

プロローグ ―― 1
壱話 ―― 5
後神いさな／設定集 ―― 16
弐話 ―― 23
参話 ―― 29
肆話 ―― 38

プロローグ

蝉の鳴き声のうるさい八月のある日。

ここは五車学園の近く、学生たちの憩いの場である甘味処『稲毛屋』。

その店先に設置されたベンチでソフトクリームを食べながら軒下に出来た日陰で涼む一人の少女。

「あっつ……」

光の加減で薄水色にも見える白銀の髪、透き通るように真っ白な肌、涼しげな淡い青緑の瞳。

五車学園の制服を身に纏った”雪の妖精”ともいうべきクール系美少女である彼女の名前は『後神（あとがみ）　いさな』。

「クオーターとはいえ雪女にこの猛暑は辛すぎるのです……

と言うか次の任務の打ち合わせで学校に呼び出されるってなんですか、学生をこき使い過ぎじゃないですか？」

光にあたり美しく煌めく髪を汗でぬれた額に張り付け、愚痴をこぼしながらソフトクリームを頬張る。

雪女のクオーターであり対魔忍として活動し、若くして”雪娘（スネグーラチカ）”の異名を持つ対魔忍。

彼女は転生者であった――――――――――――。

「夏休みなのになんで登校しなきゃいけないんだよ……」

そんなことをぼやきながら俺は額に流れる汗を拭い、学校に向けて歩を進める。

真上にある真昼の太陽からの直射熱とコンクリートタイルの路面の輻射熱、さらにはコンクリートジャングルな街のビル群で反射した熱までもが加わって、まるで天然の人工サウナのようだ。

そんな焦熱地獄のような通学路を暑さでぼんやりとした頭で進む。

ビルの建設現場、その横を通り過ぎる時に手に持った音楽プレイヤー代わりのスマホを目の前の地面に落としてしまう。

拾おうと手を伸ばし腰を曲げると眩暈が襲い、

「あぶねぇ!!」

そんな声が遠くで聞こえたと思ったら――――――――――――

ドスッ
!!!!

――――――――――俺の胸から一本、血みどろの鉄筋が生えて、否、背中から刺さっていた。

「え？」

困惑の言葉と共に口から漏れる血液、さらには鉄筋を伝っても流れ出ており瞬く間に俺の足元は血だまりへと変わっていく。

地面に縫いとめられ倒れることもなく手を伸ばした体勢のまま血の気が抜けて冷えていく身体。

（ようやく涼しくなったな……）

湯だった頭ではまともな思考なんぞ出来ずに、俺の意識は闇に溶けた

――――――――――――――はずだった。

「よく眠れたかしら、いさな」

まるで雪の女王のようなクール系美女が俺を抱きかかえている。

「だぁぅ！」

誰ですかと発声しようとしたのに言語にならずにまるで赤ちゃんのような声。

俺は瞬時に理解した、これは所謂転生というやつなのだと。

そしてこれが鉄筋に貫かれて死んだ『俺』が肉棒に貫かれないように『私』として生きる新しい人生のスタートなのだった。

壱話

私が転生してから15年の月日が流れました。
どうやらここは『対魔忍アサギ』の世界らしいです。
「はぁ……」
思わずため息が漏れるのも仕方ないと思うのです、なんせ今日は五車学園高等部の入学式の日なのです。
これから本格的にシナリオが始まってしまう予感で死にそうです。
よし、現実逃避がてら今までを振り返るとしましょう。

「あなたが生まれてもう7か月なのね」
俺を抱きかかえてあやすこのクール系美女、まぁ今世の母なのだが、とりあえず便宜上『母上様』とでも呼称しておこうか。
それはさておき母上様の言葉から分かったのが”俺”としての意識が覚醒したのは

生後6か月頃の様だ。
そして”俺”は”私”だった、具体的には女になっていた。
なぜわかったかって?ここ1か月の日数をしっかり数えてたし、自分の身体を確認するタイミングなんていくらでもあるからだよ!!
「だぁぶ!!」
「よしよし、いさなは元気ね。お腹が空いたのかしら?」
おっと、心の声が漏れてしまっていたらしい。
確かにお腹は空いていたから母上様の”我が子の状態察知スキル”はものすごいようだ。
……いや、この能力は全ての母親に標準搭載されてそうだな。
「ちょっと待ってね……よし、ご飯よ」
母上様は俺をいったん布団の上に移動させて、氷の結晶の模様の入った青みがかった雪色の着物をはだけて乳房を露わにして右側の頂点に俺を近づけていく。
端的に言えば右乳首での授乳だ。
「んちゅ…んちゅ…」
「いっぱい飲んで大きくなるのよ?」
「んちゅ…だぶ!!」

「ふふっ」
母上様の母乳はなぜか冷たくておいしい、え？羞恥心？毎日複数回こうやってたら慣れるわ。
というか今世の性別は女なんだから何を恥ずかしがることがあるというのだ。
……まだ性自認は男のままだから子供と言うことを差し引いても多少は恥ずかしいんだけども……。
そういえば父上様らしき人物を見かけなかったな、何してる人なんだろ。

「かか様、行ってきます」
私の声にかか様は嬉しそうに手を振ってこたえる。
「はい、いってらっしゃい」
まずは一人称が”私”になってるのは性自認が女に変わったから。
理由はこの女の子の身体で8年間も過ごせば必然的に仕草やら言葉使いも女の子らしくなるし、自覚も生まれたから。
えっちなイベントで思い知った的な事では決してない、そんなこと起きてたらかか様

がまず怒り狂って相手が死ぬ。
それと母上様が”かか様”になっているのは、ちょっと前に迎えた8才の誕生日の時にかか様にお願いされてしまったからだ。
こちらの手を握って「”母上様”じゃなくて”かか様”って呼んで欲しいな、いさなにそう呼ばれるのが夢なの」って美人が頼んで来たら受け入れざるを得ない。
というか、かか様のことは大好きだから美人じゃなくても受け入れるよ。
ちなみにとと様も好き、全然家に居ないけど誕生日には必ず帰ってきてくれるし、賞とか貰ったら帰ってきた時にすっごくほめてくれるから。
……なんか肉体年齢に精神が引っ張られて幼い思考回路になってきてる気がする、おそらく性自認とかの要因でおきてた肉体とのズレが無くなったかｒ
「おはよう！いさなちゃん」
「……蛇子ちゃん、おはよう。
びっくりするから後ろから急に抱き付かないでっていつも言ってるのですよ」
「ごめんごめん、でもいさなちゃんは相変わらず冷たくて気持ちいいなー
あ、体温の話だよ？態度のことじゃないよ？」
「はぁ…あんまり絡み過ぎるなよ？蛇子」
通っている小学校の校門をくぐってすぐに後ろから抱き付いてきたのは

『相州（あいしゅう）　蛇子（へびこ）』
そのさらに後ろから呆れたようにやってくるのが『ふうま　小太郎（こたろう）』
二人ともずっとクラスが一緒で幼馴染と言っても差し支えない親友だ。
もう一人『二車（にしゃ）　骸佐（がいざ）』って友達もいて４人で仲良く遊んだりしている。
「ところで骸佐くんは？」
「熱だって、季節の変わり目だからかな」
私の疑問に蛇子が答える、まぁそろそろ夏本番ですしね。
また今度４人で遊びたいなぁ…。

１０才の誕生日の日の夜、かか様に呼ばれたと思ったらある事を告げられた。
「いさな、驚かないで聞いてね。
あなたは雪女のクオーターなの。あとお父さんは対魔忍なの」
……はぇ？
「かか様？ちょっと言ってる意味が解らないんですけど？」
「私が雪女のハーフでお母さん、つまりあなたのおばあちゃんが雪女なの」

「雪女ってあの？冷気を操って人を凍らせたりするあの？」
「そうよ、その吹雪の夜に山小屋にやってきたりする雪女よ」
「通りで蛇子ちゃんに「体温低くて夏場気持ちいい」とか言われるのですね……
よし、なんか雪女っぽいことも今まで起きてないことも無かったし納得したし受け入れた」
昔、小太郎に「いさなが怒ると周りの温度が５度ぐらい下がる」って言われたのも雪女の特性って考えると納得がいきます。
「で、とと様が対魔忍ってのは？」
「ほら、お父さんいつも家に居なかったでしょ？
それって任務に行ったりしてたのよ、”妖絃の対魔忍”って聞いたことない？」
「学校で男性対魔忍でも屈指の実力者って紹介されてたけど、あれってとと様のことだったんですね……」
ってアレ？対魔忍？
うわあああああああああああああああああああ!!!!!
この世界ってあの超有名Ｒ―１８ゲームである対魔忍アサギの世界じゃぁん!!!!!
しかも私女じゃん!!!!親対魔忍じゃん!!!!ほぼ確実に忍術目覚めるじゃん!!!!公営肉オナホ生産工場行きほぼ確定じゃん!!!!!

唯一の救いなのは『対魔忍ＲＰＧ』の世界線っぽいことか……ってあのゲームも普通にエロＣＧ完備してるじゃん!!!

そうだよ、なんで気づかなかったの、私!!それっぽい要素そこかしこにあったのに!!五車町って対魔忍の里だし!その五車町に住んでるってことは対魔忍の家系だし!小太郎、蛇子、骸佐はＲＰＧの登場人物だし!

ぐぬぬ……思考が幼くなったからか前世の記憶が薄れてる気がするのです……

「どうしたのいさな、大丈夫?」

「あっ大丈夫です、かか様」

あまりの衝撃的な事実で思わず頭を抱えてしまったのをかか様に心配されてしまった。

落ち着いて、クオーターとはいえ雪女らしくｃｏｏｌになるのです私。

……………よし、とりあえずこれを聞いて否定されたら肉オナホルートは回避できるかもしれない。

「あのかか様、私に忍術って発現するんですか?」

「どうかしらね、クオーターとはいえ魔族の血が入ってるから目覚めないかもしれないけど、お父さんの能力を考えたら十分に出る可能性もあるわね」

「どっちもあり得るってことですね――――

――――――――――――――――――――あれから馴れ初めやら家系の事やら色々聞いたことをまとめると、

・父親は”妖絃の対魔忍”の異名を持つ紐使いで”後神家”の当主候補

・母親は雪女と人間のハーフで対魔忍ではない

・母方の祖母が雪女で現在も一応存命だが遠くに住んでいる

・母方の祖父は”近松家”という傀儡師の家系で傀儡人形の製作などもしている

・祖父と祖母は恋愛結婚で馴れ初めは死にかけていた祖母を祖父が助けたことから

・傀儡師の家系である”近松家”と、紐や糸を操る忍術を得意とする対魔忍の家系である”後神家”は、仕込傀儡人形の製作を依頼して造ってもらう等、代々懇意にしていて二人は見合い結婚だが好き合ってはいたらしい

等々の事が聞けました。

「最後に、なんで今日このことを教えてくれたのです?」

「なんでって雪女としての能力が発現して操作できるようになるのと、忍術が目覚めるのが大体この年齢だからよ」

「……ほんとに?」

「ほんとによ」

「はぁ……」
「可能性の話よ、目覚めるかはいさなの素質次第よ。
あらもうこんな時間ね、そろそろ寝ましょうか。おやすみなさい、いさな」
「うん……おやすみなさい、かか様」
出来ることなら目覚めないで欲しいです、切実に、雪女の能力の方はもう目覚めかけてるというか種族特性みたいなものだから誤魔化し様がありそうだけど、とと様と似たような忍術が目覚めたら五車学園入学は確定ですもん……
もう色々ありすぎて疲れた、寝よう。
今日は泥のように寝れる気がする、雪女ですけど。

わたしはいまととさまとかかさまそしてばばさまにくんれんしてもらっています。
いっしゅうかんぐらいまえにいとをせいせいしてあやつるにんじゅつがめざめました。
ゆきおんなとしてのちからもにんじゅつにふずいしてかくせいしました。
ごしゃがくえんのちゅうとうぶにしんがくがきまったのでちからのあつかいかたを

しっかりとおしえてもらっています。
がっこうはこたろうくんもへびこちゃんもがいざくんもいっしょだとおもうのでたのしみです。

……はっ！
これから我が身に降りかかるであろうあらゆる苦難、主に凌辱とかを考えるとストレスで精神が死にかけてました。
説明すると、忍術と雪女の能力が覚醒したのは小学校を卒業してすぐぐらいだったのです。
それを聞いたとと様が任務を速攻で終わらせて帰ってきて、かか様から連絡されたばば様（母の母、こう呼べと言われた）がおっきな荷物を抱えて我が家まで来て、二人ともが私が苦労しないように力の使い方をしっかり教えるって張り切ってこの状況です。
うん、めっちゃ過保護。
とと様は大事な娘とはいえ糸を使ったあらゆる戦闘方法や縛法を教え込まなくていいと思うし、ばば様に至っては大事な孫娘に色仕掛けの仕方とか男を籠絡する手練手管を事細かに描写しながら説明しないで欲しいです。
私が中学卒業するまでに俺の培った全ての技術を継承させて奥義まで教えるとかと

と様怖いです、ばば様はそんなえっちなもので何をする気なんですか！
かか様はニコニコしてないで二人を止めてください!!

現　実　逃　避　終　了　。

長すぎて入学式も終わってしまいました。
えっとクラスはっと。
「あっ」
「お」
「あー!!」
なんと小太郎くんと蛇子ちゃんと一緒のクラスでした、これで憂鬱な学園生活も楽しくなりそうですね。
ってこいつら本編の主人公とヒロイン（仮）だから離れないといけないはずじゃん!!!
もうしょうがない、小学校も中学校も全部同じクラスだったのですからシナリオでモブ以上の役割にハマってるのは確かなようなので腹括って凌辱の憂き目に会わないように必死に生き抜くのです!!!

後神いさな／設定集

名前：
後神　いさな
読み：
あとがみ　いさな
性別：
女
異名・通り名：
”雪娘（スネグーラチカ）”
使用する忍法の雪遁とその見た目から付いた名前。
その由来はロシアの民間伝承に登場する雪の妖精からきている。
家族：
父親→”妖絃の対魔忍”後神（あとがみ）一角（いっかく）、母親→旧姓近松・後神（あとがみ）美冬（みふゆ）
母方祖母→”雪の淑女（レディ・スノウ）”近松（ちかまつ）冷華（れいか）
人間関係：

対魔忍ＲＰＧのキャラである『ふうま小太郎』と『相州蛇子』、『二車骸佐』とは幼馴染である。
『上原鹿之助』とは同級生であり、小太郎と蛇子が仲良くしているため必然的に友達となった。
基本的に同年代や年下は名字にくん（ちゃん）で呼び、年上や目上の人は名字にさん付けで呼ぶことが多い。
しかしこの４人は例外的に下の名前にくん（ちゃん）で呼んでおり、親しくなれば下の名前で呼ぶ。
”後神家”はふうま傘下と言う訳ではなく、所謂中立派の家である。
ふうま弾正の起こした反乱では井河・甲河の勢力に参加して戦っていたがふうま派の対魔忍を一切殺すことはなく捕縛までに留めていた唯一の家である。
そのためいさなは小太郎に対して一切の偏見を持つことなく育てられている。
小太郎に対して現在は大事な幼馴染以上の感情はないが恋慕の情に変化することも十分あり得る好感度ではある。
能力：
”忍法・糸遁の術”
糸を紡ぎ出しそれを操作する忍法、大別すると自然系忍法にあたる。

後神家の家系忍法ともいえる『紐などを操作する忍法』が雪女の性質と交わることで紡ぎ出すことが出来る様になったと思われる。
ピアノ線ほどの細さの強度や耐荷重の高い切断などに向く『斬糸』、凧糸ほど太さで粘着性と高い伸縮性に温度や衝撃、切断等への耐性を持つ拘束などに向く『縛糸』、『斬糸』と『縛糸』の中間の性能だが粘着性は無く、主に傀儡の操演に使う『操糸』を主に使い戦闘を行う。
だがあらゆる糸を紡ぎ出せるため、様々な状況に対応できる。
”忍法・雪遁の術”
正しくは雪女としての能力で忍法ではないがなぜか忍法扱いになっている。
本人も忍法として使うためあまり雪女由来の能力と認識されていない。
雪遁と銘打ってはいるが口から吹雪を出したり、温度を下げて周囲を氷結させたりと雪を操る忍法ではない。
ある程度の指向性はあるがほぼ無差別攻撃になってしまうため乱戦時には使えず、むしろ複数の相手を制圧するときが一番強い。
もちろん火遁系の忍法とは相性が悪い。
容姿：
かなり雪女に寄った見た目をしているが体型はしっかり対魔忍である。

髪型→肩よりも少し長い、色は基本は白銀だが光のあたり方で薄水色にも見える。
顔→かなり整っている方で１０人中８人は美少女と言うぐらい。
若干つり目気味、瞳は淡い青緑。
口はやや小さ目で太巻きを咥えるのに少し苦労する。
体型→肌は透き通るように白く、手足は華奢に見えるが必要な筋肉はしっかりついている。
身長１６０ｃｍ、Ｂ８６／Ｗ５２／Ｈ７３のＥカップ、体重５８ｋｇのメリハリのある身体つき。
服装→対魔忍衣装は白を基調として水色のラインが入っている。イメージはアサギの着用しているものの色違い。
私服は五車学園の制服と白か青の服を季節に合わせて着こなす。
雪女風の白い着物も持っている。
専用道具：
傀儡人形”雪娘”
彼女の通り名と同じ名前の傀儡人形。
製作したのは母方の家である”近松家”の職人といさな本人。
精巧に造られており限りなく人間に近い、並の使い手だと近づかなければ人形とわか

らない。
忍者刀、苦無、千本が仕込まれている。
いさなに似せて作られているため、操作して攻撃する他にも潜入や味方に仕込武器を渡したり等、多岐に渡ってに使える。
戦闘方法：
一対一や多対一の場合は、雪遁と傀儡を組み合わせて立ち回る。
敵味方入り乱れる乱戦や複数人で敵を囲んだ場合などは、雪遁は使わずに糸遁で敵を絡め取り仕留める。
”傀儡操術・壱之型～拾之型”
”近松家”と”後神家”が連綿と継承してきた秘伝の傀儡操演術。
壱から拾の１０個の型があり、それを組み合わせて変幻自在な攻撃や防御が可能となる。
基本的に十指から伸びる１０本の糸で１機の傀儡を操るが、本来は１本の糸で１機の計１０機の傀儡を操作する技法である。
細かい糸の動きと対魔粒子を介することで、たった１本の糸で複雑な動きを傀儡にさせることができる。
この技術を応用することで他生物を強制的に操作したり、ドローン等の機械をジャッ

クしたりも出来る。

以下エロアイデア
決戦アリーナ時空：
シーン1
お館様に忍法を奪われ、糸遁の”操糸”で身体を操られ強制オ〇ニーと性奉仕
シーン2
乳首とクリに糸を巻きつけられての愛撫＆ａｍｐ；挿入
ＲＰＧＸ時空：

シーン1

任務途中で吹雪に見舞われて、小太郎と身体を温める目的でセッ○ス

シーン2

任務完了後にシーン1での感触が忘れられずに小太郎とラブラブセッ○ス

弐話

高等部の入学式から4ヶ月ほど経ちました。
じめっとした梅雨も明け、皆さんどうお過ごしですか。
私はいつ原作が開始するかドキドキしています。
でも私と言うイレギュラーがいてもほとんど原作通りに進んでいるみたい。
小太郎くんは”目抜け”っていう蔑称で呼ばれてるし、鹿之助くんとも友達になったみたいだし、相変わらず授業をさぼって木陰で本を読んでるしね。
私は蛇子ちゃんと小太郎くんを引きずって授業に出席させたり、”目抜け”と言ってちょっかいかけようとしてる奴等を伸したりして過ごしてるのです。
正直、前世の記憶での前情報は一部のスッゴイ印象に残った名前持（ネーム）ちぐらいしかないし、どこかのタイミングで蛇子ちゃんが攫われたり、若いさくら先生がやってくるぐらいの大きい事象しか覚えてないのです。
さらに言えばプレイしてた時もイベとかに熱心に参加してたわけでもないですし、もっと言えばストーリーも飛ばし気味で見てたはずですので前世の知識なんぞあってないようなものなのですよ。

まあ流石に計算能力とか雑学的な知識は残ってるのでテスト勉強とかは必要ないですし、実際神童と呼ばれていた時期もあったような無かったような気がします。
で、今は蛇子ちゃんと小太郎くんと一緒にお昼としてお弁当を食べていたところなのです。
なぜ過去形なのかはもう食べ終わって一息ついてるからです。
さて、そろそろ昼休みも終わるしクラスに戻r……え？
「こんなときに避難訓練ですか？」
「いやいさなちゃん、今日はそんなの無かったでしょ。
これは……」
「あぁ、これは襲撃を知らせる警報。
と言っても先生とかが対応するはずだ。
折角だから、先生たちの戦闘でも見に行くか？もちろん邪魔にならない所からだが」
「いいわね、行きましょ」
「二人が行くのなら私も行くのです」
「よし、じゃあ三人で行くぞ。
邪魔にならない様にだけ気を付けろよ」
というわけで戦闘見学に行くことになったのです。

今までも侵入者は偶にいたし今回もそんな感じの奴等だと思います。
でもなんか嫌な予感がしますね……

「戦闘音が聞こえるのはこっちの方ですね」
金属同士がぶつかる音、それに混じって聞こえる断末魔、戦闘音に導かれて観光気分で辿り着いた先で私達が見たのは地獄でした。
学生服姿で血を流し倒れている上級生らしき生徒、背中を袈裟切りにされ事切れた生徒、黒焦げになって性別しか判別できない生徒。
対魔忍となるためにその身を鍛えてきた者達の死体のなかに立つ揃いの衣装の集団。
私にも見覚えのある姿、それはふうま一族の戦闘装束でした。
「いたぞ!!”目抜け”だ!!」
「タコ女と雪女もいるぞ!!」
「面倒なことになってるみたいだな……」
ふうまの忍達、おそらくは火遁衆がこちらに気が付き忍者刀を抜き近寄ってきます。
こんな状況のなかでも小太郎くんはいつも通りな態度です。
「で、こんなとこで当主である俺の許可も無く反乱とはどういうことだ?」
「許可ならこの前うちの頭領が取ったぜぇ!!」

「この前……あれがこれの事だったわけか」
どうやら小太郎くんには思い当る節があるみたいですね。
というかこれ骸佐くんの反乱イベントですよね。
なら鹿之助くんが逃げてくるはずですけどあれは校庭であった出来事でしたっけ、なら早くいかないと殺されちゃいますよね。
今現在、私達の方が絶体絶命みたいなものですけど。
「我等は”ふうま正義派”だ。
こちらの軍門に下れば命は助けてやろう」
「ふうまちゃん、どうする?」
「馬鹿言え、こんな軽挙妄動に付きあうほどお人よしでも腑抜けでもないぞ」
「小太郎くんはそういうと思った」
私と蛇子ちゃんはさっと戦闘態勢を取ります。
正直この程度の使い手なら鹿之助や忍法に驕って数に押される有象無象はともかく、現役対魔忍にみっちり鍛えられている私や、忍法が無い代わりに鍛錬を欠かさない戦える知将の小太郎くんや蛇子ちゃんなら楽に制圧できてしまいます。
絶望的な戦力差なのに反乱を起こした小太郎くんの父親と同じことをやってるとしか思えないですよね。

「雑魚共が!! 我等に逆らったことを後悔するがいい!!」
「蛇子といさなは殺すなよ」
「チビのくせにデカい胸ぶら下げやがって、いつか揉みしだきたいと思ってたんだ」
「俺はあのクールそうなツラを歪めてやりたいんだ」
　なんかスッゴイ下卑たこと言いながら相手も戦闘態勢ですね。
「なんだ、二人とも意外に慕われてるようじゃないか」
「こんな人たちお金を貰ってもごめんなのです」
「確かに、ふうまちゃんならまだしもね」
「何をしゃべってやがる!! さっさとくたばりやがれ!!」
　小太郎くんと蛇子ちゃんと軽口を叩いてるといつの間にか10人ぐらいに増えたふうまの忍が一斉に襲い掛かってきました――

――「こんなものですね」
　周囲には気絶、もしくは動けないように拘束されたふうまの忍が転がっているのです。
　あるものは墨で黒くなった後にタコ足で締め落とされ、あるものは糸でぐるぐる巻きにされ、またあるものは顎に拳を受け脳震盪で気絶しています。

まあ見てわかるとおり左から蛇子ちゃん、私、小太郎くんの仕業なんですけど。
「この様子じゃ校舎中でおんなじことが起こってるんだろうな」
小太郎くんの言うとおり至る所から戦闘音が聞こえます、先生たちも対応してるみたいですがいかんせん数が多いみたいで手こずってるみたいですね。
「一番乱戦になりやすそうな校庭に行ってみるです?」
「そうだな、道中の反乱軍もついでに蹴散らしながら急ぐとしよう」
鹿之助くんがいそうな校庭を目的地の提案してみたら乗ってくれました。
道すがら襲われてる生徒を助けたり、先生に助太刀したりしながら校庭まで急ぎましょう。

参話

道中、と言っても階段下りて目についた反乱軍をボコるだけの簡単なお仕事を繰り返しながら、ようやく校舎を抜けて校庭に出れました。
「乱戦で敵も味方もわかったもんじゃないな」
「そうですね。
乱戦状態だと人形が無いと戦いづらいのですよ」
「いさなちゃんの忍法って対多数戦闘に向いてるものね。
ってあれ鹿之助ちゃんじゃない？」
蛇子ちゃんがタコ足で指さした先には反乱軍から逃げ惑う鹿之助くんがいました。
というかなんかこっち来てません？
あ、私たちに気が付いて助けてもらおうとしているのですね。
「ふうまああああああああ!!蛇子おおおおおおおおおおおお!!いさなあああああああああああ!!助けてくれえええええええええええ!!」
あぁ…そんな大きい声で叫んだら……
「”目抜け”だ!!”目抜け”がいたぞ!!」

やっぱり他の反乱軍たちにも気づかれますよね…

「はぁ……しょうがない、いさな」

「なんです？」

「鹿之助を追いかけてる奴等は蛇子と二人で対処するから今こっちに気が付いた奴等はまかせるぞ」

「わかったのですよ、まかされました」

小太郎くんが額に手を当てて若干あきれた様子で指示を出した後、鹿之助くんの援護に蛇子ちゃんと一緒に向かいます。

対多数の戦闘の方が得意なのは小太郎くんも知っての通りなので前世のゲームと一緒で指揮官適性が高いんですね。

「おいお前、〝目抜け〟の当主といつも一緒にいた雪女だな。

我らに従うならば見逃してやろう、もし抵抗するならば動けなくした後にお楽しみタイムだ」

「もうその判で押したような同じ言葉は聞き飽きましたよ、御託はいいのでかかってきなさい。

こちらも幼馴染を延々と蔑称で呼び続けられて少しだけイラっとしてるのです」

小太郎くんが事実だからと受け入れてしまってるので表には出しませんが蛇子ちゃ

んも私も”目抜け”呼びには結構頭に来てたりするんです。
そんなストレスも稲毛屋でアイスを食べたりして発散してましたが、ふうま正義派を自称する反乱テロリスト共に会うたびに言われ続けて、さらに毎回こんな感じに下卑た視線を向けられるとそろそろ永久凍土より硬いと私の中で噂の私の堪忍袋の緒がはじけ飛んでしまうのです。
「この人数差で何をほざいてやがる!!
お前ら、この女に身の程を教えてやれ!!」

ふうま火遁衆だと思われる集団、ざっくり２０人ぐらいですかね。
相手は多数且つ私と相性がいい火遁使い達です、余裕で勝てると思い込んでものすごい油断の仕方をしてます。
具体的には私を伸した後にどうやって凌辱してやるかを考えている目をしてます。
……それが命取りになると知らずに。
「”白の地獄（ホワイトアウト）”」
こちらを嘗めきってろくに身構えもせずに突っ立ってるので早速忍法を発動しました。
屋外または広い室内で対多数を相手にする時に最大の威力が発揮されるのがこの”

白の地獄(ホワイトアウト)”という術。

一定の範囲内を瞬時に局所的な猛吹雪に変え、相手の視覚と聴覚を封じる雪遁の奥義とも呼べる技です。

その名の通り、範囲内にいる人間は視界が雪で白く染まり、耳も吹雪の音で周囲の音はかき消され、さらには寒さで体温と思考力や判断力まで奪う、まさに白で構成された地獄に放り出されるのです。

術の性質上、乱戦時には味方も巻き込みますしセンサーの付いた機械や封じた二つ以外でこちらを補足する相手には聞きにくいのが玉に瑕なのですがね。

それでもこういう手合いには効果抜群です。

「なんだ!?なにも見えん!!お前らどこだ!!!」

「クソッ!!あの女どこに行きやがった!!」

ほらね?

もちろん私には意味がないのです。

雪女が吹雪に巻かれるなんてありえないですし、そもそも術者も視覚聴覚が封じられる術なんて欠陥以外の何物でもないですし。

さて、サクサクと行きましょうか、人数も多いですし。

「”傀儡操術零之型(くぐつそうじゅつぜろのかた)・人傀儡(ひとくぐつ)”」

糸遁を使い繰糸を紡ぎ、近くに居た火遁衆に繋げて操る。
元々は手元に自分の傀儡が無い時の応急的な手段として開発された術であり、『対魔粒子を介することで対象を操作する』という特性を持った繰糸を他生物に繋げることで対象を即席の傀儡として操作するのがこの術の効果なのです。
とと様に色々教えてもらってたのが功を奏したようです。
それでは傀儡にした火遁衆の人には同士討ちでもしてもらいましょうか。
「クソッ!!身体が勝手に!!」
「やめろ！俺は味方だぞ!!」
「ぐわあああああ!!!!」
私の指の動きと連動するように傀儡となった火遁衆が踊ります。
それは忍者刀を振りおろすように、それは苦無を投擲するように、それは体術で対象を打ちのめすように。
その集団でのリーダーと思わしき人物を除いて全滅させるまで続きました。
最後に傀儡にした火遁衆の首に縛糸を絡めて窒息させ気絶させます。
”白の地獄（ホワイトアウト）”を解除して、吹雪が晴れるとそこには刀を持ち立ち尽くすリーダー格の男と私の二人しか立っている者はおらず、あとはみな地面に倒れ伏すのみなのでした。

「貴様がそんな実力者など聞いていないぞ!!」
リーダー格の男が叫びます。
「言ってないのですから知ってるわけないのです」
私が淡々と答えます。
そもそも自分の術に驕っているような学生が現役対魔忍にずっと鍛えられてきた私に敵う道理はないんですよ。
あと一応学園の上層部に目を付けられない様に手加減したりもしてましたしね。
え？理由？そんな特別ことではないんですが、対魔忍として任務に赴くのを遅らせたかったからってだけです。
なんでかっていえば頭対魔忍の上官が立案する作戦なんて『娼婦として娼館に潜入して～』だの『奴隷を装って～』だのでそのまま凌辱✓になるからです、当たり前なのです。
「クソッ!!なぜ”目抜け”のあの男なんぞに……グッ!?」
「”縛法之伍・駿河”」
縛糸を紡ぎ瞬時にリーダー格を縛り上げ地面に転がします。
「命が惜しかったらその呼び方をやめることです。
ついでにこの襲撃の目的とか知ってることを教えてもらいましょうか」

「俺は気にしてないからいいんだよ、そして重要な情報をついでで聞き出そうとするな」
てしっと頭に軽くチョップがあたり、振り返ると小太郎くんが呆れた顔で立ってました。
肩には鹿之助くんが肩車されていてどうやら原作と似た感じで対処したみたいです。
”目抜け”は蔑称なので、正直もっと憤ってほしいんですけどね。
「私にとっては小太郎くんが正しく評価されないってことはかなり上位に来るんですよと言う訳できりきり情報吐いてくださいね」
会話しながらでも糸を絞って文字通り情報を搾り取るのは忘れてませんよ。
リーダー格と言っても小物っぽいですし縛りをきつくすれば簡単に吐きそうですね。
「わっ我らの目的はただ一つだ！
我らふうま正義派がふうまの長となり、腑抜けたふうまを変え、ふうまを虐げる現体制を排し、新たに対魔忍のトップとなる事だ！」
ほら、やっぱりすぐ吐きましたね。
部隊長気取ってたのにこんな簡単に情報漏らすとはなってないですね。
「それで？どうやって現体制を倒すというんだ？
まさか校長の井河アサギを殺すとかいいださないよな？」
「ふ、ふん！貴様が知ろうがどうすることもできん！

もうすぐ我らの頭領が目的を達成するだろうよ!!」
「なるほど、わかった」
小太郎くんがリーダー格の後頭部にハンマーを叩きこみ、意識を刈りとりました。
と言うかこれ命まで狩り取りそうな勢いでしたけど、大丈夫ですかね？
「いさな、蛇子、鹿之助、校長室に向かうぞ
アサギ校長狙いなのは予想してたが本当だったとはな……」
「そうですね、幸い校舎内の敵はあらかた片付けたはずですし、校庭は今さっき片付きましたしね」
「え？お前らそんなに戦闘してたのかよ!!
と言うか校長室に行くって本当に行く気かよ!?」
「鹿之助ちゃん、そんな心配しなくてもふうまちゃんがいれば百人力よ」
「そんなこと言ったってよぉ……」
「アサギ校長とはいえ万が一もあり得る、急ぐぞ!!」
小太郎くんがぱっと駆け出し、私と蛇子ちゃんが続きました。
鹿之助くんはしぶしぶですがついてきてくれたようです。
さて、このあとは室井先生に化けたフュルストとのエンカウントと骸佐くんとの戦闘でしたね。

気を引き締めましょうかね。

肆話

校庭での戦闘を終えた私達は、現在骸佐くんがいると思しき校長室に向かっています。

校舎の敵は校庭に出るまでにあらかた片付けたので敵と出会うことなく進めているのです。

「ホントに全然敵いねーじゃん！

お前らどんだけ倒したんだよ、ほとんど全滅してるじゃんか！」

「こちらを見つけるたびに襲ってきたのでその都度倒してましたね、そういえば」

「みんなふうまちゃんを仕留めて名を上げたかったのかしら？」

「こんな”目抜け”の当主の首を取っても名なんか上がらないと思うけどな」

廊下を走りながら校長室に向かっていると人影が現れました。

「こらこら、廊下は走っちゃいけませんよ」

「あなたは室井先生!?」

「反乱が起きてるってのになんで校舎の中にいるんですか!!

早く避難しないと、のんびりしてる場合じゃありませんよ!!」

「非常事態こそ落ち着かないといけないんですよ。
それにいつの間にか”ふうま正義派”とやらは居なくなってるでしょ。
だから怪我人を治療して回ってるんです。
たとえ万が一残っていたとしても陸上自衛軍で鍛えていたので大丈夫ですよ」
校医の室井先生。
対魔忍と言う怪我の多い職業、その卵もまた生傷が絶えないのでこういう腕のいい医者は必要なんですよね。
その正体は”ノマド”の幹部である”フュルスト”なのですが、信頼を得る為か治療はしっかりとしてくれますし、何かを仕込んでいるわけでもないので手出しは出来ないんですよね。
「そうだ、なら骸佐のやつを見ませんでしたか？」
「見ましたよ。
私を突き飛ばして校長室の方に向かっていきましたね」
「やっぱり骸佐の奴、アサギ校長を標的に……。
ありがとうございます、室井先生も気を付けてください。
まだどこかにいるかもしれないですから」
「ええ、わかりましたよ」

室井先生、もといフュルストと分かれ、校長室へと駆け上がります。
本編でも思いましたが素直に協力関係にあるはずの骸佐くんの所在を教えてくれるとは、骸佐くんに倒されるアサギ校長でも見せつける気だったのかよくわかりませんよね。
普通に校医として動いてた説が濃厚ですけどね。
なんて考えてたらもう校長室の前ですね。
「いよいよ本丸か……」
「そうですね。
気を引き締めてくださいよ、小太郎くん。
中で何が起きてるかわからないのですから」
「ふうまちゃんは大事なところでポカやらかすからね」
「おいおい、こんなところでやらかさないでくれよ?」
「骸佐との対面なんだ、やらかしてたまるかよ」
そんな感じで軽口をたたいていると中から剣戟の音が聞こえてきました。
「ッ!?
まずい、中に入るぞ!!」
小太郎くんが校長室のドアを開け放ち中に飛び込み、それに私と蛇子ちゃん、鹿之助

くんも続きます。
　中に居たのは、対魔忍衣装に身を包むアサギ校長と”邪眼・夜叉髑髏”を発動し、甲冑に身を包む骸佐くんでした。
　どうやら本気の一撃を撃ちあう前に突入出来たみたいですね。
「校長先生っ！大丈夫ですか!!」
「骸佐ちゃん！やっぱりあなただったのね!!」
「予想通りと言えば予想通りですが、本当にやっているとは思わなかったのですよ骸佐くん」
「骸佐、馬鹿な真似はもうやめろ!!」
「ッ!!?目抜け……!?」
　どうやら私達４人の登場はアサギ校長にとっても骸佐くんにとっても予想外の様ですね。
　二人の攻防が止まっちゃってます。
「今更何をしに来た!!俺の邪魔をすれば殺すと言ったはずだ!!」
「反乱なんか起こしてなんになる!?」
「腐っても当主様ってことかよ……。
　お前に口を出せた義理がどこにある!?」

「お前の策はもう見破られたも同然だ。
さくら先生や紫先生もここに来るだろう、勝ち目なんて無いんだ」
「ならばそれよりも先にアサギを殺せばいいだけだ。
無論、お前たち４人もな」
「出来るかしら?
戦力は互角なのよ?」
蛇子ちゃんの言葉に骸佐くんの髑髏の甲冑に隠された目が動揺したように揺れました。
「グッ……!!
お前ら、そこの雑魚共を片付けろ!!俺はアサギを殺るッ!!!」
「御意」
骸佐くんが自らを奮い立たせるように吠え、近くにいた反乱軍、つまりはふうまの下忍集に下知をだします。
それに応えた下忍集が私達を取り囲みました。
「ふうまッ!なんか策はないのかよッ!!」
「策を弄するまでもない!!蹴散らして骸佐を止めるぞ!!」
「そうこなくちゃ!」

「マジかよぉぉ!!」
「マジですから鹿之助くんも頑張ってくださいね」
下忍の一人が飛びかかってきました。
それを合図に四方八方から苦無や斬撃が襲い掛かってきます。
「”忍法・獣遁の術”!!」
「”電遁・スパーク”!!」
「”糸遁・空斬糸”!!」
「くらえッ!!」
蛇子ちゃんは脚を蛸に変えて自分に向かってくる全ての苦無を打ち払い、且つ足を叩きつける様にして斬りかかってくる敵を攻撃、
鹿之助くんは電遁で近づく敵を痺れさせていき、
私は斬糸で苦無も敵もまとめて斬り払い、
小太郎くんは体術のみで苦無を避けて敵を薙ぎ倒していきます。
そしてあっという間に下忍集を全滅させました。
「アサギ校長はどうなった!?」
目の前の敵に夢中で意識から外れていたアサギ校長と骸佐くんの一騎打ちに目を向けると、傷一つなく立っているアサギ校長と夜叉髑髏が壊され全身切り傷だらけで膝を

つく骸佐くんがいました。
「この程度で私が屠れるとでも思っていたのかしら？」
「グッ……」
「骸佐、お前の部下は倒したぞ！
おとなしく投降するんだ!!」
「引きますよ、骸佐君。
そろそろ潮時です」
私達が背にしている校長室の入り口から男が骸佐くんに声を掛けます。
振り返るとそこには室井先生、もといフュルストが立っていました。
「いやはや人間にしておくには惜しい強さですね、井河アサギ」
「室井先生……？
なんでここに……？」
「そういう貴様は人間ではないな。
何者だ」
「何者かなんて答える義務はありませんよ。アサギさん」
「ならば無理矢理聞くまでだ」
さっきを強めるアサギ校長と苛立ったような表情になるフュルスト。

なんか一触即発って感じになっていますね。
そういえば室井先生を採用するときに身辺調査とかしなかったんですかね。
決アリのお館様にも潜入されてたみたいですしやっぱりガバガバなんでしょうか。
「待て……
まだ俺はやれるぞ……」
「骸佐!動いたら血が……!!」
傷だらけの身体で立ち上がり、小太郎くんの心配を余所に刀に手を伸ばす骸佐くん。
「やめなさい、潮時だと言ったでしょう。
あなたに施した魔薬の限界です。
これ以上やれば本当に死にますよ。
……それに目的は既に達成しましたから」
「チッ……
そうだな……」
骸佐くんを連れて校長室から出て行こうとするフュルスト。
次の瞬間。
「簡単に逃がすと思うか」
アサギ校長が一瞬でフュルストの背後に回り込み、一刀のもとに斬り捨てました。

うん、全く見えませんでしたね。
これで全盛期じゃないって言うんですからアサギ校長マジぱねーですよ。
「お、おいふうま。あ、あ、あれ……」
「えっ……!?」
鹿之助くんが声を上げて二つの肉塊になったフュルストを指さし、小太郎くんが目を向けます。
そこには瘴気が渦を巻いて立ち上ってました。
「まだなにかあんのかよぉ!!」
「引っ張るな！俺に聞かれてもわからん!!」
瘴気は肉塊となった室井先生を溶かし、黒い霧と変わりやがて一人の男を形作ります。
現れたのは魔科医フュルストの姿、あの胡散臭い宣教師みたいな恰好の本当の姿です。
というかリアルで見るとスッゴイグロイ感じなんですね。
暫くお肉食べれなさそうですよ。
「お前は……フュルスト!?!!
ノマドの大幹部がなぜ……」

「私が五車学園に潜入していたことに驚きですか？
　そうでしょう、そうでしょう」
　動揺の隠せないアサギ校長や小太郎くん、それを見てご満悦なフュルスト。
　ちなみに私は”知ってた”って感じなのですけど、驚いてる演技をしてるのです。
　いさなは空気の読める女なのですよ。
「これぞ我が魔界医療技術の粋を結集した肉腫変装術なのです!!
　人間の目を欺くことなど造作もないんですよ!!」
「うるせぇぞおっさん……
　傷に響くだろうが……」
「すみませんね、骸佐さん。
　それでは帰りましょうか」
　フュルストが手を振ると黒い穴が開きました。
　まるでと言うかまんまワープゲートですねアレ。
　流石魔族、魔法みたいですね。
「待て骸佐!!
　ノマドと手を組むのがお前の望んだふうまなのか!!」
「……」

「答えろ骸佐!!」
ワープゲートに消えていく骸佐くん。
最後にちらりと左目がこちらを見たような気がしました。
「クソ……待て!!」
「ふうまちゃん、気を付けて!!
何かくるよ!!」
蛇子ちゃんの声に反応して小太郎くんが飛び退くとさっきまで小太郎くんが居た場所に大きな拳が振りおろされ、陥没します。
それは骸佐くんたちが消えて行ったゲートから伸びていて、複数の魔物が姿を現しました。
「どうやら足止めの様だな。
あの二人はもう追えん、この魔物を片付けるぞ」
アサギ校長の指示で全員戦闘態勢に入ります。
２ｍはあろうかと言う異形の魔物が腕を振りまわしての攻撃。
それを悉く躱し、斬撃を与えていくアサギ校長。
しかしあまり効いてないみたいですね。
「クソ……なんてタフな野郎だ……」

「こいつらはオーガ奴隷と言う魔物だ。
知能は低いが強靭な肉体とパワーを持っている、気を付けろ」
しかしそんな中でもこちらに解説を挟む程度には余裕があるみたいです。
どう見ても１０体ぐらいいる様に見えるんですが。
「おい、ふうま！
俺達もなんかやれることやろうぜ！
微力だろうけどアサギ先生の助けになるはずだ！」
「何か策があるのか？」
「それはお前の担当だろ!!」
「はぁ……しょうがない。
プランＢだ」
「なんだよそれ」
「説明の時間はない、指示を出すからその通りに動け」
「ちゃんとした作戦なんだろうな!!」
「ああ、ただし一発しか使えないとっておきだ。
蛇子、いさな、準備はいいな」
「も、もう。仕方ないわね……うひ、えへへ」

「しょうがないですね、小太郎くんは、ふふふ」
「ひぃいいいい!?
蛇子の様子がおかしいぞ!?
心なしかいさなまでなんか嬉しそうに笑ってるぞ!?」
「いいから俺を信じろ!
作戦開始するぞ」
これが嬉しくないわけがないでしょう。
普段あんまり頼ってくれない小太郎くんが頼ってくれるわけです。
自然と笑みも浮かんでしまうのもしょうがないのです。
頭がなんかふわふわするのもきっとそのせいなのでしょう。
さっき小太郎くんに飲まされたアルコールのせいではないと思うのです。
「デカブツ共――――!!
こっちにもいるぞーーーー!!オラッ!!」
近くに居たオーガの尻にイスを叩きつける小太郎くん。
こちらに気が付き向かってくるオーガを私と蛇子ちゃん、鹿之助くんと小太郎くんになるように分かれて飛び避けます。
そして、

「いくわよいさなちゃん！
獣遁の術・タコじゃぁぁんぷ!!」
私を抱えて蛇子ちゃんがタコ足で飛び上がりオーガ集団の真上の天井に張り付きます。
「獣遁の術”タコ墨シャワー”!!」
「糸遁の術”縛糸・粘”!!」
「”合体忍法・墨糸縛りの術”!!!!」
蛇子ちゃんが口から墨をその名の通りシャワーのように降り注がせ、私が糸をオーガ奴隷の顔に巻きつけ視界を封じます。
オーガ奴隷の身体は墨で黒く染まり、
私の紡いだ白かった糸も墨で染まって、真っ黒です。
黒い糸も悪くないですね。
というか視界を奪われたオーガが暴れてますけど大丈夫なんですかね。
「見事だ二人とも!!!」
「また同じ手かよ!!?
トンカチが効くような相手じゃないぜ!!?
しかも暴れてて近づけやしないぞ!!」

「次はお前だ鹿之助!!」
「えっ？」
　きょとんとした鹿之助くんをブン投げる小太郎くん。
　小柄な身体はオーガ奴隷の頭上に放物線を描いて到達します。
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ」
「鹿之助!!静電気だ!!」
「はあああああああ!??
　静電気いいい!!?」
「いいからやれ!!
　死にたくないだろ!?」
「だあああああ!!わかったよもおおおお!!!」
　困惑と恐怖で歪んだ顔で身体にか弱い電気を纏わせる鹿之助くん。
「電遁の術・静電気いいいいい!!」
　放たれた小さな放電は小さな小さな雷になってオーガ奴隷に直撃しました。
　すると蛇子ちゃんの吐いた墨に火が付き、それに全身を覆われていたオーガ奴隷は火だるまになります。
　特に頭は私の糸のおかげで燃え方が半端ないです。

あれ？このままだと鹿之助くん火だるまオーガにまっさかさまじゃないです？
と思ったら蛇子ちゃんがナイスキャッチです。
「よくやったお前たち!!
あとは任せろ!!」
そう言ったアサギ校長の刀が煌めき、炎を振り払おうとするオーガの足元を光が一閃します。
「忍法・光陣華」
その一瞬でオーガはバラバラになり床に倒れ伏してます。
隼の術……原作で知ってはいましたけど目の前で見ると凄まじいですね。
本当に光の速度で動いてるみたいでしたよ。
その余波でオーガに着いていた火も消えちゃってますし。
それはともかく蛇子ちゃんとハイタッチです、いえーい。
「いえーい、いさなちゃんいえーい！」
「いえーい、蛇子ちゃんいえーい！」
「い、一体何が起きたんだよ、なんか二人とも変だし……」
「途中に落ちてたアルコール度数の高い酒を二人に飲ませて、蛇子には墨に混ぜて放たせて、いさなには糸に混ぜ込んで紡がせた。

で、そこにお前の静電気で火をつけたって訳だ」
「落ちていたとはいえお酒を女の子に飲ませて酔わせるなんて中々不良な発想ね」
なんか状況を冷静に見てる自分と酔っぱらってる自分が同居してる感じのなんか変な感じですね。
テンションも変に上がってますよこれ、お酒には気を付けないといけないですね。
「お館様!!
……この有様は?」
「時子!!」
どうやら時子さんが来たみたいですね。
原作通り小太郎くんをある意味溺愛してるのにこのタイミングってことは何かあったのですかね。
「五車学園から『二車主導でふうま衆が反乱を起こした』との報を受け急ぎ来たのですが、〝槍の権左〟に足止めを受けこの時間に……」
「そうだったのか……
いや、権左を退けてよく来てくれた」
「いえ、それが途中で反乱軍と思しき集団と共に撤退を……」
「骸佐の撤退を察知したってことか」

二人の会話に割ってはいるかのようにアサギ校長が時子さんに話しかけました。
「時子、ご苦労。
敵の追撃には誰か出ているか？」
「紫先生が。追撃の指揮を執っています」
「なるほど。報告ありがとう」
一通りの報告を受けたアサギ校長はいつもの優しい顔に戻って小太郎くんに向き直りました。
それよりも酔いが回ってものすごく眠いのです……。
「ふわぁ……うぅん……」
「時子のよく話してる当主君に色々話を聞きたかったのだけど、先にこの二人を医務室で寝かせましょうか」
「そうですね、二人には結構戦ってもらった上に作戦とはいえアルコールも飲ませてしまいしまいましたし……」
「お館様？アルコールの件がどういうことか後でじっくり聞かせてもらいますよ？」
「そうね、それも含めて医務室で話を聞かせてもらいましょうか」
「ひぇっ……
鹿之助、助けてくれ!!」

「無茶な作戦に付き合わされたのは俺も一緒だしな」
そんな会話を聞きながら意識は微睡に沈んでいきました。
私が寝ている間に小太郎くんがどんな大目玉を喰らうかわかりませんが、なるべく被害の無いように祈ってるのです……。

どうやら原作通りの流れが寝ている間に済まされたみたいですね。
これで小太郎くんは独立遊撃隊の隊長に任命されたわけですか。
ここからはほとんど記憶にないシナリオになるのでどうなるかわからないですけど、小太郎くんとなら何とかなる気がするのですよ。
あ、でももうお酒を使った作戦は遠慮させてもらうのです。